第１回館長講座　『考古学はどういう学問だろう・「縄文」と「縄紋」』

司会：定刻となりましたので，館長講座を始めさせていただきます。

今日は，館長講座にお集まりいただきまして，どうもありがとうございます。

今年，2016 年は，去年までのタイトルと変わりまして，『縄紋いろは語り』ということで，縄紋時代についてのお話を，全 15 回でお話しさせていただきたいと思います。

『いろは語り』ということで，48 回の講座を行えばいいのでしょうけれども，今年の館長講座は，基本的に第 2・4 土曜日であり，今日を含めて 12 月までの 15 回になりますが，よろしくお願い致します。

早速，今日の講座になりますが，考古学とはどういう学問なのか，そして「縄文」と「縄紋」という，「えっ！？」と思うようなタイトルかもしれませんけれども，鷹野館長からお話ししたいと思います。それでは，館長，よろしくお願い致します。

館長：みなさん，こんにちは。

この『縄紋いろは語り』は，本館の職員が付けてくれました。「いろは」だと，48 回やらないといけないのかもしれませんが，先ほど司会が言いましたように，そうもいきませんので，ご理解願います。

さて，「いろは」と言いますと，少し前に明治時代の辞書を調べたことがあるのですが，明治時代の国語の辞書の中には「いろは」の順で書かれているものがあります。

言葉の順番が「あいうえお」ではなくて「いろは」で始まりまして，目的の語を探すのに，大変苦労した覚えがあります。

今日は，このようなテーマですが，まずは，「私の考古学遍歴」といいますか，その一部分を自己紹介をかねてさせていただきます。それから，考古学といいますと，皆さん，それぞれに，いろいろな思いをお持ちだろうと思いますが，学問としての考古学というものをまず押さえておきたいと思います。そして，もうひとつ，非常にこだわりのあるところですが，言葉のこと，これは昨年の第 1 回目も言葉のお話をさせていただきましたけれども，今回も言葉について取り上げていきたいと思います。

それでは，自己紹介的なところで，私の考古学遍歴ということになりますが，大学では考古学を学んできました。専門としたのが，縄紋時代の最後の時期ですね，縄紋時代の晩期の土器を中心に手掛けてきました。それも，住まいが東京でしたから，身近な関東地方の土器をおもに取り上げていました。

最初に就職したのは，千葉県市原市教育委員会というところですが，これは大学院生の頃から，非常勤の発掘調査の調査員として関わっていたところで，そこでは，縄紋時代の晩期の遺物とずいぶん出会いました。

大学生の頃には，ここに示したように，大学の実習施設もあった関係で，北海道の北見市常呂町（ところちょう），私が通っていた頃は，北見市ではなくて，北海道常呂郡常呂町だったのですが，平成の大合併で北見市常呂町になっています。

これは余談になりますが，常呂といいますと，最近ではカーリングが非常に有名なところです。カーリングが常呂町で盛んになるというか，行われるようになったのは，その当時，常呂町にありました東京大学の実習施設に赴任しておられた藤本強（つよし）先生が，「まちおこし」のために，こんなことやったらどうかというアドバイスをしたことがきっかけになったと言われています。

さて，ここに示した，常呂町のライトコロ川口遺跡，その前の岐阜第 3 遺跡とかですが，常呂町には岐阜とか栃木の地名がありますが，これは，岐阜県の方などが開拓に入られて，そこでもともとお住まいのところの地名を付けたということなのだそうです。

岐阜第 3 遺跡というところで，続縄紋時代，これは縄紋時代に続く時代ですね，本州では弥生時代か古墳時代くらいに相当する頃ですけれども，この博物館にも続縄紋時代の土器が展示もされております。

それから常呂町ライトコロ川口遺跡というところは，擦紋時代で，続縄紋時代に続く時代で，室町時代まで至るような時間の幅があるようです。

このライトコロ川口遺跡というのは，牧場の中の遺跡で，しかも，国定公園の中でしたので，発掘をしたら原状回復せよという条件での発掘でした。つまり，掘った土を全部戻す，牧場ですから，掘った土を全部戻すだけじゃなくて，表面に生えていた芝土というか，牧草をまた元のように戻せということです。戻すのはいいんですけど，掘る前に何があるかというと，牧場ですので，いろいろ落し物がたくさんあるわけです。最初のうちは，牛の糞なんか嫌だなぁと思いながらやっていましたけれど，そのうち平気で素手でつかむようになってきました。

それから西崎山遺跡というのは，これは，若い頃の写真ですが，右下の写真，西崎山遺跡のこれは配石遺構で結局これはお墓のようなんですけれども，石を積み上げた遺構でした。

左上が岐阜第 3 遺跡というところ，あと 3 枚はライトコロ川口遺跡です。

20 代の若い頃で，この頃は，体力にあまり自信があったほうじゃないんですけれども，それでもスコップをふるって荒掘りから埋め戻しまでやっていました。年を取ってその頃のそのツケが出てきていまして，今日もちょっと腰が痛くているわけです。

それから，上は栄浦第 1 遺跡というところの続縄紋時代のお墓です。これは私が全部担当したんですが，続縄紋時代ですから縄紋時代の人の系統を引いた人だろうということですが，これを最近まで東北大学におられました百々幸雄先生いう人類学の先生に鑑定していただきました。縄紋人というより，むしろアイヌの人にすごく近いようだということでした。

下の写真は，ちょっと違いまして，これは東京の文京区の向ヶ丘貝塚というところの発掘の風景です。

それから，北海道以外のところでは，大学院に入った直後から，福岡市の板付空港の近くの板付水田遺跡というところに 2 年程関わりました。

あとは，手あたり次第（or 行き当たりばったり）ですが，船橋市の八栄北遺跡では，真夏の 40 日間，暑いさなか，大学院の 1 年生の時でしたけれども，まだこの頃は，ちょっと暑くなると，光化学スモッグ注意報が出る頃で，そんな注意報が出たりする中でしたが，真夏の 40 日間ここで生活したということが，この世界でも発掘しながらという生活がやっていけるんじゃないかなという変な自信を持った遺跡でした。

ちなみに，大学院の 1 年目は，あとで数えましたら，365 日の 3 分の 1 を発掘現場にいたという状況でして，大学に行って授業を受けながら，3 分の 1 現場に行って，夜は家庭教師なんかもやっていましたので，そういうハードな生活をしていましたが，若かったんですね。

それから，先程も言いました市原市の教育委員会で，このふたつ，西広貝塚，祇園原貝塚という縄紋

時代の遺跡にでは，本当に研究材料となるような良好な資料に出会うことができました。

あとは，文京区の向ヶ岡貝塚，これは弥生時代の貝塚ですけれども，ここについてはこの講座の中で，またどこかで取り上げてみることに致します。

そして，最近関わっていたのが，一番下の鹿児島県指宿(いぶすき)市の敷領(しきりょう)遺跡ですが，これは2004年から火山噴火罹災(りさい)遺跡の調査ということで，874年の3月23日の夜に開聞(かいもん)岳(だけ)の噴火で埋もれた遺跡の調査をしていました。これが10年程続けた遺跡であり，発掘との関わりという意味では，これが最後でした。

それから，海外調査にも何回か行かせていただいております。

最初は，1978年のイランでの調査で，ラメー・ザミン遺跡です。ラメー・ザミンというのは，トゲのある草のあるところという意味の言葉だそうです。ここは初期鉄器時代の墓地遺跡で，右のようなお墓ですね，これは子どものお墓です。下は女性の，ちょっと歳をとった女性のお墓です。

こういうのがあったり，それから，まん中の写真，あれも子どものお墓なのですが，子どものお墓というのは，必ず座って埋葬されており，大人は寝せて埋葬されるという違いがありました。

左下ですが，あれは，馬だったかな，普段は，車で通うんですけれども，トヨタのランドクルーザーで通っていたんですけれども，雨が降ると道がぬかって四輪駆動の車といえども動けないので，歩いていけばいいのに，わざわざ馬を調達して，馬やらロバやら調達して，発掘現場に出掛けるということをしていました。このイランの発掘調査ですが，私が始めて飛行機に乗って外国へ出た，初めての海外調査でした，それまで，海外というのは行ったことはなかったので。

それから85年には，イタリアのシチリア島のローマ時代の帝政期の別荘遺跡の発掘に参加させていただきました。

上の写真，合成なんですけれども，このようにすぐ海岸沿いにあるところで，この写真だけではちょっとわからないですけれども，普段，土曜とか日曜になると，パラソルが並んで海水浴の人たちがたくさんいるという環境でした。

先程のイランの調査，あれは墓地遺跡の調査ということで行ったんですが，このシチリア島の場合は，あくまでもローマ帝政期の別荘遺跡の調査ということで，私が担当したところはここの部分です。

真ん中に残っているこれなんですけど，これは何かというと，この部屋が崩れて天井が落ちて崩れる前に，これはお風呂場ですけれども，お風呂場の中に土が溜まっていて，地震でもあったのでしょうか，屋根が崩れた，と。

これ自体が，屋根材なんですね。天井の一番下に，漆喰(しっくい)を貼ったところがあって，そこにレリーフがあるという状況なので，何とかそれを出せと言われたのですが，とてもとてもそんなことできなくて，また掘っている最中に地震でもあったら壊れちゃうという状況でした。

これを保存しながら調査するために，イタリアの人たちに相談したところ，どうしたらいいかというと，そんなのは簡単だって言うんですね。土をどかして，その下に柱を立てればいいんだと簡単に言ってくれるんですが，レンガを積み上げて，それで柱にしようというのですが，言われるのは簡単ですが，やるのはとてもとても無理で，そんなの無理だと，しかも危なくて怖いんだっていうことを言ったら，つっかえ棒（支え棒）をしてくれましたが，正にこれ精神的支柱というんだと思いました（笑）。

これは，掘っているところなんですけれども，このところに，一体，これは子どもの墓が出てきました。子どもといっても幼児じゃなくて，10 歳か 15 歳くらいの子どもの埋葬されたものが出て来まして，家を掘っているのに何でお墓出てくるんだよ，と思いながらやっていました。

この時一緒に行っていた方の中に，現在の東北学院大学学長の松本宣郎先生がおられまして，松本先生はクリスチャンなものですから，自分が弔ってあげるよと言ってワインを持って来て，ワインをドボドボッとかけて埋葬したんですが，でも，ローマ時代ですから，まだキリスト教はないんですよね。でもローマ時代というのは多神教ですから，八百万（やおよろず）の神がいるところなので，キリストでもいいし，とにかく冥福を祈るというか，ちゃんと埋葬するということが大事なんだなと思った次第であります。

そして，90 年に 1 か月ちょっとでしたが，タイの遺跡，これはカンボジア国境に近いところです。タイ東北部のイーサーンと通称するところですけれども，タイの中でもわりと貧しい農村地帯です。そこに鉄を生産する遺跡があり，その調査するというので，鹿児島大学の新田栄治先生の調査に参加させてもらって行ったんですが，こんなものがあり，ここから空気を吹き込んで溶かす，そんな簡単な炉みたいなものが点々とあるという遺構でした。

ここに丘があって家が建っていますけれど，これ自体がだんだん，人の生活の中で高くなっていって，生活している間にゴミを積んで高くなっていくんですね。そういう丘の一部が削られていました。そこの削られていたところを見ると，こういう遺構が出てくるというので，この崖のところは，土層の状況を見るために，ちゃんときれいに清掃しました。

これは鉄生産遺跡であるというので調査したはずなのですが，ちょっと掘ったら，時代がよくわからないんですけど，鉄器時代よりちょっと前かな，腕に青銅の腕輪をはめていたり，首にビーズ玉で首飾りをしていたりというようなお墓がありました。

こういう鉄の生産遺構を掘っている段階では，周りの人はほとんど見向きもしなかったですが，お墓が出た，人骨が出た，なんてことになると，町中というか，村中の人が，わっと集まって来ました。なぜか，バンコクのほうまで情報が伝わっていって，テレビ局が取材に来たり。

こんなことがあって，人骨の持つ，変な怪しげな力ってあるのかなと思ったりしました。

この辺で，自分自身で，なんで目的外のものが出るんだろう，ちょっとおかしいなと思い出しました。最初，イランに行ったときはお墓でした。次のイタリアは，家でした，別荘でした。タイの，ここは鉄生産遺跡，それなのになぜ，お墓にあたるのだろう。

そこで，勝手に自分で，ジンクスをこしらえました。“私が外国で調査をすると必ず人骨にあたる”，と。まだ 3 例目でしたけど，そう思いました。

92 年から 10 年間くらいですね，今度はローマから北西に大体 90 キロくらい行ったところのタルクィニアという町の郊外にある別荘遺跡を調査し始めまして，これも，私の調査というのではなくて，この間，お辞めになった前の文化庁長官の青柳正規（まさのり）さんのチームに加わって行ったのです。

この調査の時は，最初の 3 年間は現場監督をやりまして，その段階での，一行の様子です。

ここでも，ちゃんと，ここのところからですね，写真には出ていませんけど，子どもを埋葬した墓が出て来ています。4 例目なので，自分では当たり前だと勝手に思い込んでいます。

この発掘調査自体は2002年くらいにおわりまして，2002年くらいの段階ではこんなに広がっています。

ここもこの先ちょっと行ったところがすぐ海で，海岸沿いにある別荘遺跡でした。ここのところから，きれいな床のモザイク，ちょうど海で漁をしているようなモザイクが出ていますし，それからここの部分では，山で狩りをしているという床のモザイクが出てきていまして，私が現場監督をやっている頃は，そういうのが出ていなかったんですけれども，こんな遺跡を掘りました。

そんな遍歴できておりまして，いよいよ，考古学とは何ぞやというところのお話です。

ここからは，まず，研究者たちが考古学という学問をどういうふうに言っていたのか，一般的な考古学というものに対する見方というのは，大体こんなところかなというところから始めます。

まず，イギリスの考古学者でギリシャのクノッソス宮殿なんかの発掘調査をした David Hogarth という人は，「人類過去の物質的遺物を扱う科学」という簡単明瞭な決め方をしています。この，遺物ということですね，具体的なものを扱う科学であるということです。

それから次の J. de Morgan，このかたはフランスの考古学者で，オリエント考古学の先駆者でして，イランのスーサという遺跡で有名なハムラビ法典などを発掘した人です。それとともに，考古学の歴史の中では，石器時代の区分の中に，中石器時代，旧石器，新石器という言い方がありますが，その旧と新の間に，中石器時代という時代を置こうじゃないかということを提唱したことでも有名な人です。

このモルガンが『考古学研究その目的とプロセス』という本の中で，「人類の出現以来今日までの人文の発達を研究すべきもの」という言い方をしました。ここでは「人文の発達」，いわゆる歴史研究であるいうことを明確にしたわけです。

そして，イギリスの考古学者で，メソポタミアのウルの遺跡の発掘などをされたウーリー，Leonard Woolley は，「2 千年，3 千年前のことを研究する学問であるが，その対象とするところはあくまでも現在の人間であり，今の私たちの生活の拠り所というべきものを明らかにするべきものである」と言っています。時間は，2 千年前，3 千年前と言われていますが，古い過去のことをやるんだけれどもその対象とするところは，あくまでも現代の人間であり，「私たちの生活の拠り所というべきもの」とする，温故知新的な考え方を示しています。

高校生くらいの人で「考古学をやりたい」なんて言ってくる人の話を聞くと，「何をやりたいの」と聞くと，「実は，恐竜のこと調べたいんだ。だから，考古学やりたいんだ」というようなことを言う人もいました。高校生でもそうなので，もっと小さい子どもたちもそんなふうに思うかも知れません。これでおかしいのは，恐竜の時代というのは，人間はいませんから，考古学の対象ではないんですね。考古学の対象は，あくまでも人間だというところ，これが，大きなところです。

それから，Stanley Casson，この人は第二次世界大戦末期に戦死された考古学者ですが，「モノを作るヒトとしての活動に重点を置いて人類の過去を研究する学問」と言っています。

これらの，4 人の主張というか言説を紹介しましたけれども，過去のことを扱うのであり，人間の歴史に関わるもの，しかも，具体的なモノ・資料というのがあって，それを通じて研究する学問であるというのが，共通しているところかなと思います。

そして，オーストラリア生まれでイギリスで生活していた G. Childe ゴードン・チャイルドの言説です。この方は，オーストラリアのシドニー生まれで，ロンドン大学で考古学の研究所などの所長をされてお

られました。

文化が伝播するという考え方を強く広めた方で，世界の経済というのは，オリエントから起きて，ヨーロッパやアジアへだんだん波及していく，その各地に文化を派生させるという文化の伝播論で，学会にも衝撃を与えたと言われています。

チャイルドは，ロンドン大学をリタイアした後，郷里のオーストラリアに帰りまして，オーストラリアで1957年に崖から投身自殺をしております。学問的に日本の考古学に影響を強く与えたと言われる人でありますけれども，なぜ，自殺なんてされたんだろうということに，いろいろと謎を考える人もいるようです。

そのチャイルドの言説は，「考古学は，人間の行為に基づく物質界のあらゆる変化を研究する。考古学の記録を構成するものは化石となった各種の人間行動であるが，できる限りその行動を復元し，そこに示された思想を再現することが考古学者の仕事である」ということであります。

これを翻訳された近藤義郎さんは岡山大学でずっと考古学を担当されておられまして，チャイルドの仕事を積極的に日本に紹介してきた方でありました。

そして，今度は，日本に考古学というものがすでに導入されて来て，その後，日本の考古学者たちがどういうふうに考えていたのかということです。

最初に坪井正五郎，この方は，この講座の話の中で，最初のうちに何回も出てくるかたです。明治時代の日本の考古学・人類学のリーダー的な存在だった方です。

坪井正五郎が言うのは，「考古学は古物古建設物遺跡等に関する実地研究の基礎として当時の事実を正確に推考するを努める学問なり。考古学研究においては何所までも実物に関する知識といふことに重きを置くことを正当とする」ということです。

「当時の事実を正確に推考する」，これはなかなか難しいことを言っているわけで，正確に推考するというのは，どうですか，できますかね。

推測は推測であって正確かどうかは別のまた解釈だと思うんですが，事実をしっかり捉えるんだと，そして後半の「何所までも実物に関する知識」については，実物によってものを言うというのが，考古学の正統とするということを言います。

これは，今までのヨーロッパ，イギリスやフランスの考古学研究者たちの言うところとも同じようなことであると思います。

その下の，浜田耕作は，京都大学の総長までなった方ですけれども，『通論考古学』という考古学のテキストを書かれていまして，この本は今でもまだまだ使えるのではないかなと評価されます。

この中に書いてあるのは，「考古学は過去人類の物質的遺物（により人類の過去）を研究するの学なり」とあり，過去の人類，そして物質的遺物によって研究すると，至極，単純明快な言い方をされていまして，考古学というと，大体，この定義をポンと出せば，それでいいのかなという感じもするくらいのところです。

他の研究者，藤田亮策。この方は朝鮮総督府の博物館での仕事をされて，戦前のソウルにありました京城帝国大学の教授をされていました。朝鮮各地から満州東北部にかけての遺跡などの発掘調査をされていました。朝鮮古文化の保存調査に非常に力を尽くした方です。戦後は東京芸術大学の教授をして，考古学者の集まりで日本考古学協会という学会組織がありますが，そこの初代の委員長を務められ，そ

の後，奈良の文化財研究所の所長もされました。

その藤田亮策は「考古学とは過去の人類が残してくれたあらゆる物質的資料の比較研究により，過去の人類の発達変遷を研究する学問である」と言っています。言葉の違い，使っている単語が多いということはありますが，物質的資料と過去人類の発達変遷を研究するということで，今までのかたとあまり変わらない言い方であると思います。

それから，水野清一(せいいち)。この方は京都帝国大学を卒業されて，京都大学の教授をずっとされていました。専門は，中国考古学でした。もっぱら外国の遺跡についての調査を行いまして，日本における海外考古学調査の草分け的存在という言い方もされます。

平凡社で出した『世界大百科事典』の中で考古学というのを書いていまして，「過去の人類が残したあらゆる有形物を通じて人類の過去を研究する学問」と，そのものズバリですね。

最後に，もうお一方，関野雄(たけし)先生の定義です。中国考古学の研究者であります。

関野先生は 1941 年に中国の留学から帰って，東京帝国大学の文学部の助手になるんですが，43 年に兵隊に取られ，応召されます。普通，帝国大学の先生が兵隊に取られると，最初から偉くなっちゃうんだそうですが，先生はずっと二等兵で，召集解除になったころは，もうちょっと上だったと思いますが，その普通のところから始めたと言っておられました。

46 年に，また東京大学へ戻られ，その後，法政大学を経て東京大学の教授になられまして，私が大学に進学した時には関野先生が主任教授でした。

関野先生が『世界考古学事典』という，これも平凡社で出した事典の中で，考古学という項目を担当されて，その定義を書いています。

関野先生がおっしゃっている考古学の定義というのは，今までのとはちょっと違うところがあります。この話は，関野先生が大学の授業の中でずっとされていました。ほとんどその受け売りですけれども，読んでみますと，「広義の歴史学の一分野で，発掘を行うことを本領とし，人類が残した物質的資料，つまり遺跡・遺物の解釈を通じて，人類の過去の生活ないし文化の変遷を明らかにする科学」です。

今までの，坪井正五郎以来の人たちとちょっと違うところは，ひとつは，「発掘を行うことを本領として」という言葉です。その前に「広義の歴史学の一分野」であると断りをしている。あとは「物質的資料」，モノだと。モノで人類の過去の変遷を明らかにすると，ここのところは，変わりないんですけれども，大事なところは今のふたつ。

「歴史学の一分野である」ということをはっきりさせたこと。なぜそれにこだわるかといいますと，普通言うところの歴史学は，大学の歴史学の講座とか，歴史学を研究するところというのは，何によって歴史を構築するということをして来たかというと，大体，文献資料ですね。文字に書かれたものによって，例えば，平安時代なら平安時代の貴族たちの日記であるとか，それからもっと時代が最近に近くなってくると，江戸時代ならば地方(じかた)文書とか，とにかく文字で書かれたものを中心にして，その歴史というのを考える，構築する，ということをやってきたわけです。

そうすると別の言い方をすれば，文献史学という言い方もできるんですね。文献によって構築された歴史学って，書かれたものは全部正しいことが書いてあるとは限らないですね。日記にしたって，その人の真実が全部書いてあるかといえば，そうでもないわけで，それから，人の思い違いなんて，たくさんある。いろんな人の日記を照らし合わせてみて，これが真実だろうということを探り出すということ

をするわけです。

そういう歴史学，多分これは歴史学の本道だろうと思うんですけれども，そういうところと，それから，そうでない歴史学というのが，あるだろうということです。

つまり，ここでいう考古学による歴史学ということです。特に最近のように歴史時代というか，近世・近代，それから場合によっては現代。現代というとなんですが，今のところ，昭和20年代くらいの段階までは考古学の手法による調査，考古学の研究ということが，適用されています。

だから，考古学のほうからいうと，そういう歴史時代についても考古学の調査が取り入れられていく，歴史考古学という分野，もっというと，中世考古学とか，近世考古学とか言うような人もいますけれども，ひっくるめて，歴史考古学という分野，これが確立してきています。

歴史学という言葉に，先程言いましたように文献史学という言葉から出てくる歴史学と，それから考古学の手法によるような歴史学というような，二通りの意味が持たれるようになってきたといえます。

そして，もっと広い意味の歴史学となりますと，文献だけではなく，それから遺跡や遺物だけでもなく，つまり考古学の資料あるいは文献の資料だけでもなく，民俗資料といったものですね，これらもその資料として考えながら，あらゆる資料を使って研究するという，これが歴史学ということになると思うんです。それから，文字，つまり文献によって研究する文献史学だけではなく，文献によらない歴史学の一分野という捉え方が，考古学にはできるんだといえます。

ただ，最近は，考古学の中でも単に出てきた遺物の観察によるだけではなくて，自然科学的な手法で手を加えていくということからの研究も進んでいますので，歴史学，広い意味の歴史学という捉え方をするのはそれでいいんですけれども，もしかしたら考古学に関わってきた人たちの中でも，いや，歴史学だけじゃないというような人もいるかもしれません。

それから，もうひとつ，「発掘を行うことを本領とし」としています。これは今までの定義の中には出てこなかった言葉で，中身的にはそういう意味合いを含んでいたんだと思うんですが，ここで発掘という資料の獲得手段というと言い過ぎになるかな，資料を得るための調査として，発掘調査というのがあるんだと，それで発掘によって資料を得るのが考古学であるということを言うわけです。

遺跡や遺物といったものは，それぞれ他の学問の研究対象にもなっているわけです。例えば，遺物として出てきた土器にしても，あるいはその他のものにしても，よく，縄紋土器なんかだと，美術館の中にデンと据えられているものがあります。これは，美術史の研究対象にもなるということで，そういう扱いもされるわけですし，遺跡というか遺構，建物の跡，これなんかは，建築史という分野では非常に重要な研究材料であるわけです。

それから，また，遺物はさっき言いましたように，しばしば単独で美術史だとか，あるいは，技術史，石器なら石器を作る技術，テクニックとか，そういった技術史の資料ともなっているわけです。

でも，それでは美術史のほうで，そういった資料を得るために発掘調査を経るかというとそうじゃないんです。建築史も，もちろん，建築史の人で発掘する人もいますけれども，建築史という学問の本質的な部分で自ら発掘調査をして資料を得るという部分は必ずしもないだろうと思います。

つまり，発掘調査という手段を通じて研究資料，材料を得るというのは，これは考古学だけなんです。だから，発掘調査こそ，考古学の本領であり，生命であるともいえるんです。

ですから，考古学者のひとつ悲しい習性ともいえるかと思うんですけれども，発掘して出て来たものしか相手にしないんです。

逆にいうと，いつも本物しか見ないんです。そうすると，偽物というのは変なんですが，しばしば土器なんかで，異なるパーツを集めてひとつの土器に組んじゃったというのが，でてくることがあるんですが，そういうのを見分ける目というのが，果たして私自身にあるかどうか。多分，ないと思うんです。本物と偽物という言い方をしますと，それを見分ける目は，実は両方見ておかないと分からないものですね。考古学の人間というのは，本物しか見てないんです。しかも遺跡から出て来たものです。だから，骨董屋さんの店先にある遺物というのは，本来，考古学の研究対象にはなりえないと思います。もちろん，骨董屋さんの店先にあるものでも，それがどこから出土したもので，どういう経過を経て，今そこにあるんだということがはっきりしているものは，研究材料になりますけれども，そうでないものは，研究材料とはしないということです。

この，発掘というのは非常に大切な方法です。これはもうひとつの考古学の悲しい性ですが，発掘というのは遺跡を対象とするわけですが，遺跡というのは，私が学生の頃は，37 万ヶ所だったが，今は，40 数万ヶ所，日本列島にあるといわれています。そこを発掘調査していくということは，遺跡を壊すということでもありますね。昔の人の建物の跡を掘り出すことでも，少なくとも埋まっている状態の遺跡だったのが，掘り出してしまう遺構ということになって，そしてそれは場合によっては，その後，なんらかの工事のために壊されてしまうということが起こりうるわけです。

悲しい性というのは，遺跡を発掘して新たな資料を得られるけれど，それと引き換えにその遺跡は無くなっていくことが，多々あるということです。これは学術調査というあとで工事などで壊すことを前提としない調査であっても，いったん発掘した遺跡は元に戻らないんです。

非常に気を付けて注意して調査をしますけれども，それでも戻らない。だから，考古学というのは言ってみれば，自分の足を食っていくタコみたいなもので，調査が進めば進むほど，その研究が進めば進むほど，研究対象・研究材料というのが，だんだんなくなっていってしまいます。

私が生きている間は大丈夫だろうと思うんですけれども，将来どうなるかというと，ひと頃，アームチェア・アーケオロジーという言葉が流行ったことがありまして，机の前に座って椅子に座って，本を読みながら過去の遺跡の発掘調査の報告などを見ながら研究するのが考古学だというように言われるようになるんじゃないかというような，冗談のような，ちょっと時間が経つと本当になってしまうかも知れないようなことが言われたことがありました。

結局，考古学というのは，そういう広い意味での歴史学の一部を構成するところである，そして，資料というのは，発掘調査というちゃんとした決められた手段によって得られるものであり，そこで得られた物質的なもの，具体的なものというものを通じて研究していくという学問だということがこの定義で見えます。

そうしてみますと，この学問の名前なんですけれども，ちょっと変じゃないかなということも思ってしまいます。普通，学問の名称というのは，歴史学は歴史を研究する学ですね，生物学とか社会学とか，大体，研究対象というのが何かということがはっきり書いてあるわけです。心理学にしても，それから，博物館学にしてもそうですし，みんなちゃんと学問の研究対象が名称に表れているはずなのに，考古学とは，なんですか，昔を考える学，昔を考えるというそういう行為がしめされているので，研究対象を表すべきだという人もおられました。

角田文衛（つのだぶんえい）さん，京都にある古代学協会というところを主宰しておりました角田文衛氏が考古学とは変だから，ハッキリ研究対象が見えるようにしようということで，遺物学にしたらどうだという提案をさ

れたのです。確かに遺物は研究対象でありますけれども，考古学の中で扱っているのは遺物だけじゃなく遺跡だってあるじゃないか，遺跡学というのは別にあるようですけれども，そうすると遺物学で考古学のことを全部ひっくるめてというのはおかしいし，あまり面白くないんで，やっぱり考古学かなと。

あいまいだけど，このほうが，夢とかロマンとか何とか持たせる，そういう意味での，ある良い誤解を人々に与える名称かなというふうにも思います。

強調しておきたいことは，考古学というのは，とにかくモノがなければものを言わない，しかも，そのモノというのは，発掘調査という手段を通じて得られたものであるという，そういう学問だということです。だから，今さっき，夢やロマンと言ってしまいましたけれども，必ずしも夢やロマンに関わるような学ではなく，もっとシビアなものだという部分があります。

ただ，考古学で取り扱っている世界は今の私たちが誰も見たことのない世界ですから，そこにいろいろな解釈というのは出来るわけです。ひとつの遺物について，いろんな解釈ができるわけで，ただその中にどこかに真実はあるんでしょうけれども，そのいろいろな解釈が可能だという部分の楽しさというのはあるんだと思います。

そういうのが，考古学という学問であるということでした。

そして，3 つ目の話題で，「縄文」と「縄紋」なんですが，言葉にこだわっていまして，日本の石器時代の名称として使われている「縄紋」という言葉，この名前，これは，最初から「縄紋」という言葉があったわけではないんです。

江戸時代の書物の中でといいますと，藤貞幹（とうていかん）の『集古図（しゅうこず）』『好古日録（こうこじつろく）』というような書物の中には，1 片の縄紋土器というのが紹介されています。それに付けられた説明が「二十余年前岡崎村土中瓦器（がき）一枚ヲ掘リ出ス」ということで，その縄紋土器片の説明をしているんですね。瓦の器というか，瓦器と書いていました。

それから，『耽奇漫録（たんきまんろく）』という本の中には，青森県の亀ヶ岡遺跡から出土した土器について「古陶器（ことうき）」，古い陶器という言い方をしていました。瓦器，焼き物だということは認識されていたんでしょうね。

ですけれども，瓦器とか，古陶器とかで，土器という言い方はされていないですね。

エドワード・シルヴェスター・モース（E.S.Morse）は，明治時代になって大森貝塚の調査をした人ですけれども，1879 年に“Shell Mounds of Omori”という大森貝塚の発掘調査報告書を出しております。

その中で，この大森貝塚出土の土器について，‘cord marked pottery（コード マークド ポタリー）’と記載をしているんですね。cord mark は，紐（ひも），縄（なわ）などのことですが，モースさんは英語で報告書を出しただけではなくて，最初から日本語版も出すという計画がありまして，矢田部良吉という方が，この“Shell Mounds of Omori”を訳しています。訳すといっても口訳，口で喋って，それを寺内章明という人が筆記します。そして『大森介墟古物篇（おおもりかいきょこぶつへん）』という題名の日本語の報告書を出しました。介墟（かいきょ）の「介」，こんな字が書いてあるんですが，これは貝殻，シェルじゃなくても，音（おん）が同じならいいってことなんでしょうか。

この訳の中では，‘cord mark’という部分は，「索文」と訳されています。この索は，これもコード，つまりロープです。よく，船，帆船なんかの紐のロープは，この索という字を使うようですけれども，私のイメージとしては，索のほうは少し太い縄，縄は普通の縄というイメージがあるんですが，同じ繊維をよった縄という部分で同じだということが言えます。

「縄紋」という言葉が，最初に文献上に表れるのは，明治19年のことです。白井光太郎というかたが，このかたは植物学者になるんですけれども，この頃，先程の坪井正五郎と並んで人類学・考古学に非常に大きな関心を持っていたかたです。

『人類学会報告』という雑誌の中で，「石鏃考」という一文を寄せました。この中で，「明治17年4月予郊外に植物ヲ採集セルノ際同行宮沢作次郎君ト共ニ石鏃五枚ヲ代々木村縄紋土器ヲ出スノ麦畑中ニ得タリ」という表現をしています。

石鏃を報告する中ですけれども，「縄紋土器ヲ出スノ麦畑中ニ得タリ」，つまり今ふうに言うと，縄紋時代の石鏃・鏃の採集を報告するということをしたんですね。

坪井正五郎と，この頃は仲良かったので，初期の人類学会の中心人物ですけれども，この人類学会は学会という名前ですけれど，今ふうに言うとサークルのちょっとしっかりしたもの，という感じでしょうか。

そのサークルの仲間たちの間では，縄紋土器という言葉が割合普通に使われていたようです。実際，白井光太郎が先程の「石鏃考」に記す前に書かれたものの中にも，やはり縄紋土器という言葉が出て来ていました。昭和7年に出された「武蔵國久良郡石川中村穴居記」という名前の遺跡の探訪の記録ですが，これについては，明治16年8月4日に行ったんですが，その時の記録をこの遺跡の探訪の直後に書いていまして，この未発表の原稿が「ドルメン」という雑誌に昭和7年に発表されました。

その中で，縄紋土器という言葉が使われていまして，白井光太郎は少なくとも明治16年という段階で「縄紋土器」という言葉を使っていた，そして，おそらく白井だけではなくて，人類学会をめぐる人々の中では，割合，共通の用語として使われていたんじゃないかと想像されます。

それから，一方，「縄文」のほう，糸偏のない「縄文」のほうですが，これについては，明治21年に神田孝平という方が「史前器所蔵之原由」という一文を『東京人類学会雑誌』に寄せています。この『東京人類学会雑誌』というのは，先程の白井光太郎の人類学会報告から名称が変わった人類学会の紀要・機関誌です。

この中で，「…人夫ヲ傭ヒ，土中悉ク掘穿シ篩ニテ瓢別シ明治二十一年戊子一月廿六日迄ニ縄文土器残欠凡ソ貳升以上石斧一本発見致シ…」というふうに，この文章の中で糸偏のない縄文の文，文という字を使っています。

この神田孝平という人は，明治時代の官僚です。先程の白井光太郎は自分で行って掘って探したんですけど，神田孝平は人夫を雇って，「土中悉ク掘穿シ」と言うと，かなり深く，ワーッと掘ったんですね。

先程の坪井正五郎は，どういうふうに言っていたのかというと，実は縄紋という言葉そのものを使っていませんで，「貝塚土器」とか「蓆文土器」とかいう言葉を使っていました。「貝塚土器」という言葉は貝塚から出土する土器だから，という意味ですね。それから，「蓆文土器」とは何かというと，これは縄紋土器の縄紋の模様ですね，あれは筵のように編んだものを押し付けたんだと，それによって付いている模様なんだと，そういう解釈がされていましたので，そういった点から，「蓆文土器」という表現をしたようです。

坪井が主宰していた人類学会は影響力というのが相当ありますので，むしろ縄紋土器，糸偏の有る無しに関わらず，縄紋という言葉よりも，どうも一般的にはこちらのほうが主流だったと言えるようです。

坪井が縄紋という言葉を使わなかった理由，これは憶測にすぎませんけれども，モースとの関係なの

ですね。モースは，先程も言いましたけれども，‘cord marked pottery’という縄目の模様だと書いています。いずれこの講座の中でもお話ししますけれど，日本の縄紋土器の模様の付け方を解明したと言われるのは山内清男です。山内清男が東北大学にいる時に発見したということになっていますけれども，モースが‘cord marked pottery’という言葉を使ったというのは，もしかしたら，モースは縄を使った模様だということを承知していたんじゃないかということを想像させられるんですね。それでは，モースがどこでそれを知ったのかということは，これは全く私にはわかりませんけれども，同じく縄を使って，縄を転がすようにして付けた模様の土器とていうのは，日本だけじゃなくて，アフリカやアメリカにもあるんですね。多分，そういうものを見ていたんじゃないかな。でも，それが縄を転がしたものだったということをちゃんと承知していたかどうかは，わかりません。でも，縄の模様だというふうに，モースは書いてある。

坪井正五郎は，どうもモースへの反発というか，そういう気分があったらしくて，日本の考古学・人類学がモースから始まったというようには考えたくないというところがあったようです。実際，モースが発掘した大森貝塚，これはモースがずっと一緒にいたというわけじゃなくて，モースの指導する学生たちが現場に行って調査したりとか，発掘をしていたわけですけれども，そのモースに関わっていた人たちというのは，ほとんど，その後考古学には進んでいないんですね。

そこで，坪井正五郎などの系統の人が，系統というと言いすぎかもしれませんが，関わりを持った人たちが考古学ということをやっていくようになるわけですけれども，そういうところから，日本の考古学・人類学というのは決してモースに始まったんではないという自負が，坪井にはあったんだろうと思います。

モースは大森貝塚を発掘して，その発掘した資料を板に紐で止めてそれを展示するということをしているんですね。坪井正五郎は，ある時，出て行って，こんなのもう古いからと言って，それを取り去るということもしてしまった，これは解釈の仕様ですけれども，モースのやったことを否定したいということかもしれません。

そんな機運があったんだろうと，ここには反発と書きましたが，そこまで強いものではないにしても，モースよりも上だという意識があったということは確かだろうと思います。だから，「縄」を使わなかったんだろうと思います。

坪井正五郎という人は，いろいろ活躍してくれた人ですけれども，これも後でお話の中に出てくる日本の先住民論争，石器時代の住民論争というものの中で孤立無援の立場を取ってしまうんですが，その論争のさなか，論争の終末期と言っていいのかな，ロシアのペテルブルク，今のサンクトペテルブルクでの学会に出掛けて，そこで客死してしまうわけです。

それとともに，坪井の影響力は無くなるんですけれども，その坪井正五郎が面倒見て来た鳥居龍蔵，このかたも明治後半から大正，昭和のなかばくらいまでの学問の巨人ですね，鳥居龍蔵とか，それから坪井以後の人たちというのは，この「貝塚土器」とか「蓆文土器」という言葉を使わなくなっていきます。

あまり詳しくお話してしまうと後で楽しみがなくなりますので，簡単に言いますが，坪井正五郎は，日本の石器時代の人というのは，アイヌの伝説に出てくるコロボックルというものだと言うんです。そうであることを証明するために，当時坪井正五郎の下で助手をやっていた鳥居龍蔵が北海道の各地や千

島に派遣されて，証拠を探せということで調査して来るんですけれども，残念ながら，鳥居龍蔵の調査では，坪井の考えに反する結果ばかり出てくるということになって，結局，鳥居龍蔵は坪井の考え方は継げないし，したがって，鳥居龍蔵は「貝塚土器」とか「蓆紋土器」という言葉も使わなくなってくる。

それでは，どういうふうに言うか，どういう言葉を使ったかというと，「アイヌ式土器」という表現をしました。これは，鳥居龍蔵が坪井の命を受けて，北海道各地や千島各地の調査をする，そういった事実から，日本列島の先住民っていうのは，アイヌの人たちだろうという説を出すんです。

これが，コロボックル説以後，非常に強くなって来まして，有力になって，鳥居龍蔵始め人類学者の小金井良精，このかたは星新一のおじいさんで人類学者ですが，アイヌ人が石器時代の先住民だったということで，「アイヌ式土器」というような表現をするようになっていきます。

縄紋のほうに立ち返ってみますと，この，「縄紋」と「縄文」なんですが，糸偏のある「縄紋」のほうは，先程紹介しました浜田耕作の『通論考古学』の中で「縄紋式土器」と使われています。それから，糸偏のない「縄文」のほうは，昭和 2 年の後藤守一（しゅいち）の『日本考古学』という本の中で「縄文式土器」として使われてから，この「縄文式土器」が一般化していきます。

また，縄紋土器と言っても，縄紋土器という言い方と，縄紋式土器という言い方があるんですね。それから，弥生土器という言い方と弥生式土器という言い方がありますが，この「式」という文字については，私は縄紋土器，弥生土器というふうにして，「式」を付けないことにしています。

何故そのように言うかというと，縄文式のように「式」を付けるんだということを主張する研究者は，「式」を付けるんだから，次の弥生も当然，弥生式土器だと。それから，その次の古墳時代の土器はどうなのかというと，これは縄文・弥生の土器の伝統，系譜を引くのが，土師器（はじき）と呼ばれる焼き物，素焼きの土器で，一方，大陸から伝わってくる須恵器（すえき）というのがありますが，それに付いても，土師器でなくて，土師式土器，須恵器も，須恵器じゃなくて，須恵式土器という言い方をすべきだという主張を一貫してするのですが，どうも，そこのところがおかしい。

土師器は土師器で，須恵器は須恵器だと思います。「式」は使わない方が良いだろうというふうに思いますので，縄紋土器，弥生土器というように言います。

その縄紋の「紋」と，糸偏のない縄文の「文」なんですが，これはどうでしょう，皆さん，同じ文字でしょうか。字が難しいから，画数が多いから，簡単にして，簡単にした文字を使おうという動きはありますね。極端になったのは，大陸の中国ですけれども，中国で使われているのは，あれはもう漢字じゃなくて記号ですね，全く。

それと同じような考え方ができるんだろうか，同じ文字でしょうかということを突っついたのが，佐原（さはら）真（まこと）さんです。佐原さんは，奈良の文化財研究所でお仕事をされていて，亡くなる少し前は，千葉県の佐倉（さくら）にあります国立歴史民俗博物館の館長さんをなさっていた方で，一時，考古学の世界のスポークスマンというか，一般向けの発信をしてくれる人というようなことを自認されていた方でもありました。

佐賀県に吉野ヶ里遺跡という遺跡がありますが，あの吉野ヶ里遺跡をあそこまで有名にしたというか，人々の関心を引かせたのは，佐原さんじゃないかなと思います。というのは，佐原さんは吉野ヶ里遺跡の発掘当初，あそこで高楼（こうろう）というか，楼門（ろうもん）みたいな遺構が見られる，それを称して，邪馬台国の風景が見えるようだ，というようなことを言ったんですね。それで，そのことで多くの方が邪馬台国に飛びついて，吉野ヶ里遺跡が邪馬台国と結び付けられて，年間 200 万人ですか，そのくらいの人が遺跡を訪れ

て大人気の地になりまして，縄紋をやっていた私からすると，「いいなぁ，弥生時代は。邪馬台国があるから。縄紋にも邪馬台国ほしいなぁ」と思っていたんですが，そのくらいでした。佐原さんがそういう言い方でもって遺跡に対する関心というのを確保してくれた。

ちなみに吉野ヶ里遺跡については，渥美清（あつみきよし）の『男はつらいよ』の最後のほうでしたか，吉野ヶ里遺跡に行っているんですね。あそこでボランティアの人たちに声掛けたりして，渥美清の寅さんがやって来る，というものでしたけれども，渥美清さんが，この遺跡を見て，「なんだ，穴ばっかりじゃないか。穴しかないじゃないか」と言ったらしくて。復元された建物にも中に何もないんです。感想を言ったとか言わないとか，それを受けて，復原した建物の中には，遺物の複製が置かれたりするようになったということが有ったとか無かったとか。発信力のある方が何かを言ってくれるというのは，考古学の世界にはとても良いことだと思います。吉野ヶ里は，それでもって関心が盛り上がって，考古学の成果をすごく広めました。

そして，三内丸山遺跡ですよね，青森県の。やっと，縄紋にも邪馬台国が来たかと思ったんですが，三内丸山は確かに大きな遺跡で，すごい遺跡なんですが，縄紋の都市という表現をしてしまって。都市，なんてもんじゃないですよね。都市というと，ちゃんとインフラが整備されていて，そういった環境をいうんだけれど，それこそ，渥美清じゃないですけれど，三内丸山へ行ったって穴しかないわけですから，今は，復元したものがたくさんありますけど，発想の仕方がちょっと違うんじゃないかと思ったことがあります。ちょっと余分な話になりました。

その佐原真さんが，『縄文土器大成』という縄紋土器の写真集の大きな本なんですけれども，この中で，こういうふうに言っています。

ここから敢えて糸偏のある方をもん，ない方をぶんと分けて読みます。「私はときおり，紋と文について考えます。文様・縄文を使う人は，紋が教育漢字の一つで，文と別字であることを知ってのうえですか。漢字の簡易化を意図して，紋を文にするなら，指紋，紋章，家紋，紋付は，指文，文章，家文，文付と書くのですか。教えてください。施紋法を施文法，無紋化を無文化でいいのですか。」というような，愚痴を言ってくれたんですけれども，こういう表現をして，糸偏のほうが正しいというんだと言っています。

本来の文字の意味からすると，これは佐原さんの言うとおりだなと私は思いますので，糸偏のある文字のほうを使いたい。しかし，高校までの教科書の中でも，それから一般向けの書物の中でも，やはり糸偏のない縄文の文字のほうが，普通に使われていると思います。現に佐原さんがこういう愚痴を書いた本の題名が『縄文土器大成』です(笑)。

縄紋時代の研究仲間で，縄文時代文化研究会という研究会組織がありまして，毎年，論文集を出しているんですけれども，その会が始まる時に，これについて，ちょっとやり取りがありまして，この縄文時代文化研究会を主宰するリーダーが，自分は文でいきたいから，それで納得してくれと言いました。会の名称としては，それでいいだろうけど，中でどういう文字を使うかは自由にしてくれということで，やってきています。

考古学の言葉をなるべくわかりやすい言葉にしようというのが佐原さんの主張でした。なるほど，この糸偏のない指文とか文章とか，そういう言葉，こうやって書いてしまうと，確かに無紋化が無文化になってしまうというようなことで，おかしいなと思います。

それから，縄紋土器の最初のほうの段階の土器で，土器の表面に粘土の粒々を貼り付けた土器がある

んです。それを最初に報告した方が，豆粒文土器と書いてトウリュウモン土器というふうに読ませたわけです。今でもそれが通用していますけども，佐原さんは，そのところにも，それでいいのかと言っていまして，言葉でなくて音で聞いたときに，豆粒文土器と言われた時に，一般の人がわかるだろうか，トウリュウモンと言うと，普通は龍が登る門ですね。だから，そういう言い方ではなくて，マメツブモン土器とでも言ったほうが，まだわかりやすい，そういうような言葉の言い換えというのをしていかなくてはいけないんじゃないかということも主張されました。

そう言われてみると，考古学の中の言葉というのは，おかしく思える用語がたくさんありまして，「考古学」自体がそうだというのを先程言いましたけれども，形が似ているからというだけで，石の刀と書いて石刀というものがあります。石の刀だけど，刀じゃないんですよね。石棒，石の棒と書きます。確かに石の棒なんですけど，棒じゃないんですよね。もっと言うと，石斧は石の斧だから，その言葉からすれば，斧なんだろうと，斧の先だろうと思われるかも知れませんが，実際は，斧として使ったものもありますけれども，そうではなくて，掘り棒の先に付ける，土を掘る為のものだ，など，言葉，用語からモノそのものが見えないものがたくさんあるというのが考古学の欠点かなとも，思います。

そういうようなところで今日のお話は終わりにさせていただきますが，最後にひとつ。

レジュメのほうには拓本の図をのせてしまいました。今年度はこれを最後の頁にしたいと思うんですが，この土器のことを紹介させていただきますと，これは北海道の釧路で出土した幣舞式土器といわれる土器です。これ自体は上から見ると楕円形に近い形をしています。

なぜこれを取り上げたかというと，実は，これは私，自分で勝手に思っているんですけど，これは私自身の書いた図のなかでは一番よくできたと思っているものです。この土器の用途はよく解らないんですけれども，口縁部のここのところに穴が開いていまして，こちら側にも開いているんですが。それから，底は平らだけれども，置くと安定しない。すすがついています。こういうところから，どうも，紐を通してぶら下げたんじゃないかなということを言う人もいますが，ぶら下げるにしては，この穴，ちょっと弱すぎるんです。

全体が太い渦巻門というか，それから非常に細かい線が引かれていまして，こちらの細かい線とちょっと長めの線とあるわけです。口のところには上から，これは細い縄ですね。これを押し付けたような紋様がありまして，この土器を釧路の博物館で，真冬に，何日かかったかなぁ，何日かかけて，あまり条件の良くない蛍光灯のスタンドのあかりのもとで図を取ったのを覚えています。

この図自体は釧路市立博物館の土器の説明版のところで使われておりましたし，この間，北海道博物館へ行きましたが，そこでも，この土器のレプリカが展示されていました。こんなものを描いたというのも，私の考古学研究のひとつでした。

お話は，以上で終わります。今日はどうもありがとうございました。

（拍手）

司会：はい，お時間になりましたので，ここで終わらせていただきたいと思います。

今年15回の講義になりますとお話ししました。次回は，5月の21日，第2土曜ではないんですけれども，5月の21日に，縄紋時代の生活についてということで，暮らしの中身のほうのお話になっていくか

と思います。どういう時代かということで，お話ししますので，よろしくお願い致します。
今日は，ありがとうございました。

（拍手）